

・報告「クラクフにおける日本のふるさと～」"The Japanese Home in Krakow" Report	P1
・報告「『紐帯』としての日本語～」"The Japanese as a bond" Report	P2
・「外国語と日本語の対照言語学的研究」"Contrastive Study for Japanese～" the 14th Research Seminar	P2-P3
・「パレスチナでいま何が起きているか～」"What is happening in Gaza" Report	P3
・「依頼行為の対照研究～」"Strategy Adopted by Native Japanese～" Report	P3-P4
・特任研究員紹介 Introduction of ICJS Special Researchers	P4
・活動報告(2014年10月～2015年2月)Activity Report (Oct.2014 - Feb. 2015)	P4

## 国際シンポジウム「クラクフにおける日本のふるさと～」報告 2014年10月15日 International Symposium "The Japanese Home in Krakow ~ "



同会の企画・司会をご担当された本学ポーランド語科の森田耕司先生に寄稿をお願いしました。外務省の2014年「V4（ヴィシェグラード4カ国：ハンガリー・スロバキア・チェコ・ポーランド）+日本」交流年事業の一環として、ポーランド共和国の古都クラクフにある日本美術技術博物館manggha開館20周年を記念した国際シンポジウム「クラクフにおける日本のふるさとー日本美術技術博物館mangghaの20年」が開催された。このシンポジウムでは、同博物館のボグナ・ジェフチャルク＝マイ館長とカタジナ・ノヴァク副館長、加須屋明子氏（京都市立芸術大学）、スタニスワフ・メイエル氏（ヤギェロン大学/本学国際日本研究センター）を講師として招き、同博物館設立の経緯と20年にわたる歴史、同博物館で開催された日本関連の様々な企画や催しに関するポスターの特徴とその魅力、そして同じクラクフにあるヤギェロン大学日本学科との協力関係についての講演及びディスカッションが行われた。

また同時開催のポスター展「クラクフにおける日本のふるさとー日本美術技術博物館mangghaの20年」にも、学内外を問わず多くの人々が足を運び、同博物館の輝かしい20年の歴史を振り返りつつ、日本とポーランド両国の絆に思いを馳せる絶好の機会となった。ポスターのキャプション翻訳には本学ポーランド語専攻の学生たちも参加した。このポスター展は、2014年10月15日（水）から11月14日（金）まで開催された。

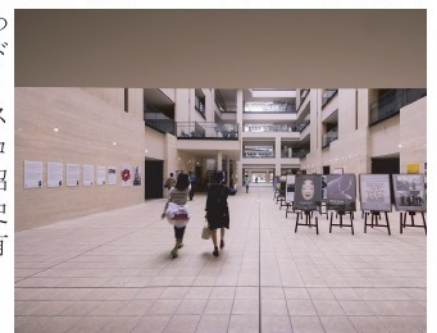
ポスター展の会期半ばにあたる2014年10月25日（土）と26日（日）、本学で日中韓三国ポーランド学会議が開催された。この会議が開催されることになったのは、2007年に韓国外国語大学校ポーランド学科開設20周年を記念した国際学会「アジアにおけるポーランド研究」での、

韓国外語大学校、北京外国語大学及び東京外国語大学のポーランド研究者の出会いに端を発する。その際に、隔年持ち回りで「日中韓三国ポーランド学会議（SPTK）」を開催することを合意し、第1回会議は2009年に本学で、その後、北京外国語大学、韓国外国語大学校の順に開催され、今回の本学での会議が4回目となった。

この会議には、日中韓のポーランドを専門とする教員や学生、ポーランドの大学で留学生のポーランド語教育に携わっている教員、世界におけるポーランド語の普及を推進している政府機関の代表、日本在住のポーランド人や留学生も参加した。報告はすべてポーランド語で行われ、主な内容は、

ポーランドの言語、文化、歴史、社会に関する教育、ポーランド研究の歴史と現状、参加者による最新の研究成果に関するものであった。在東京、在北京、在ソウルのポーランド共和国大使が全員出席したことから、この会議に対するポーランド政府の関心の高さがうかがえる。同時開催中のポスター展の鑑賞もこの会議のプログラムに加えられていたため、会議参加者全員がポスター鑑賞を通して日本とポーランドの文化交流の一端について触れる機会を得た。

そして、ポスター展の会期終盤にあたる2014年11月13日（木）、「映画を通して考えるポーランドの歴史と文化」というイベントが開催された。このイベントは、クラクフにある日本美術技術博物館mangghaの設立者であるアンジェイ・ワイダ氏（1926～）が、映画監督・舞台演出家など、さまざまな分野で卓越した業績を残してきたポーランド文化の巨匠であることから、本学が開催した「クラクフにおける日本のふるさと」国際シンポジウム及びポスター展の一環として、ワイダ監督による代表作を通して、ポーランドの歴史と文化について学ぶことを目的に開催されたものである。本学のポーランド人教員であるヤグナ・マレイカ氏とスタニスワフ・メイエル氏をコメンテーターとして招き、ポーランドの歴史と文化について学ぶ有意義な機会となった。（森田耕司）



**This report has been contributed by the planner, moderator of this event, Prof. Koji Morita, an associate professor of Polish Studies, TUFS.** As part of the "V4+Japan" exchange year organized by the Ministry of Foreign Affairs, ICJS hosted an international symposium entitled "The Japanese Home in Krakow - 20 Years of the Manggha Museum of Japanese Art and Technology" to celebrate the 20th anniversary of the museum's opening. Museum Head Bogna Dziechciaruk-Maj and Deputy Head Katarzyna Nowak alongside Akiko Kasuya (Kyoto City University of Arts) and Stanislaw Meyer (the Jagiellonian University, Krakow; ICJS) headed lectures and discussions on the background to the museum's founding, the posters publicizing the numerous Japan-related events held there over the past 20 years, and its links with the Jagiellonian University's Japanese department. A retrospective poster exhibition was held October 15th -November 14th. Polish majors at TUFS helped to translate the poster captions. The exhibition provided the perfect opportunity to reflect on Japan-Poland ties and attracted visitors from within and outside TUFS. A China-Japan-Korea academic conference on Poland was held October 25th-26th. Participants had the chance to enjoy the poster exhibition and its role in Japan-Poland ties. On November 11th ICJS welcomed leading Polish cultural figure Andrzej Wajda, renowned film director and founder of the Manggha Museum, to speak on Polish history and culture, in an event entitled "Polish History and Culture Through Film". (Koji MORITA)

## 研究会報告「『紐帯』としての日本語～「日本」を離れた日本語」 Seminar Report "Japanese as a bond: Japanese outside of Japan"

2014年10月30日



科研「<紐帯>としての日本語」の研究  
成果を基に社会言語部門主催で公開研究会  
を開催した。

谷口龍子氏は「『国語』としての日本語、  
日本語排除から継承日本語へ」のタイトル  
で台湾における日本語事情についての歴史  
社会的背景と、現地で20家族に行った「日  
本語補習校」についての調査結果を柱とした成果を発表  
した。調査対象の多くは母親が日本人というカップルと  
その子どもたちである。彼・彼女らの継承語獲得の戦略  
としてだけでなく、「ハーフ」である子どもたちと台湾  
で生きていく日本人女性たちの拠り所としての機能も補  
習校は持たされている。この報告は言語継承があたりま  
えで、それができないことを問題視する視点だけにとら  
われず、補習校をやめた人々にもインタビューをしている。  
友常勉氏によるカリフォルニアを中心としたフィール

ドワークの報告は「日本語」の象徴性をさらに鮮やかに  
する。多くの日系三世の使用言語は英語であり、上の世  
代とのコミュニケーションや「日本」との関係において  
のみ日本語が現れてくる。日系アメリカ人は太平洋戦中  
の強制収容に焦点が当てられ、日本人側の身勝手な解釈  
でノスタルジックに語られてしまうこともあるが、決して  
「異境で日本を守る集団」ではないことがわかる。友  
常氏の報告は宗教と伝統文化を日系三世はどのように自  
分たちのものにしてきたか、についてまず語られるのだ  
が、彼らなりの解釈と需要が投影  
されたものに作り替えられている。  
公民権運動との関わりや、「アジ  
ア系」であることを見いだすとい  
う経験に、いまの日系人の精神的  
な生産活動の基盤を見いだしてい  
るようにも見える。(前田達朗)



**The Sociolinguistics Dept. of ICJS has represented the Kaken project "Japanese as a Bond" with their findings.** Ryuko TANIGUCHI showed the historical and social background of Japanese in Taiwan and the responses of Japanese women in the families to a survey about Taipei Japanese Supplementary School. The school not only passes on the Japanese language, but also provides support for these mothers and their children. The presentation did not simply underline the necessity of language inheritance, but also featured interviews with those who had left the school. Tsutomu TOMOTSUNE presented fieldwork conducted in California which reveals the symbolism of Japanese. The image of Americans of Japanese descent can be romanticized, focusing on their internment during WW2, but they are by no means "preserving Japan in a foreign land". The third generation of Japanese-Americans have adapted religion and traditional culture to reflect their own interpretations and needs. Their spiritual foundations appear to stem from participation in the civil rights movement and the experience of realizing their "Asian" identity. (Tatsuro MAEDA)

## 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第14回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" the 14th Research Seminar

日時：2014年12月13日(土)14:00-17:40

場所：東京外国語大学留学生日本語教育センター さくらホール

発表：長屋尚典(東京外国語大学)

「重なる形、繰り返し意味：フィリピン諸語の重複と反復」

斉藤弘子(東京外国語大学)

「英語の本当の音節構造のはなし」

講演：角田太作(国立国語研究所名誉教授)

「私が行ってきた研究—日本語学から一般言語学への貢献—」

まず本学の長屋尚典氏による研究発表『重なる形、繰り返す意味：フィリピン諸語の重複と反復』から始まった。フィリピン諸語の紹介の後、テーマであるタガログ語の繰り返し現象に移る。この言語には、形態的プロセスとしての「重複」と統語的操作である「反復」の2つが見られるが、両者にどのような相違があるのか。また、言語類型論的には重複の方が類像的(iconic)とされるが、反復ではどうか、など問題提起がなされる。重複はその構成により3種類が見られ(CV, CVC, その両方の組み合わせ)、機能・意味・用法は多種多用。意味は共起する要素や品詞で重複の意味は予測できること、他の接辞との組み合わせで特定の意味になることを特徴とする。一方、反復語もその2語をつなぐ統語要素により3分類される。新しいデータや視点からの分析により、重複と反復には音韻・形態・統語・意味のレベルでの違いが見られ、類像性は、重複よりもむしろ反復において典型的であると結論。繰り返しのシステムについて学びその複雑な構造に驚嘆した。



次に本学の斉藤弘子氏による『英語の本当の音節構造のはなし』の発表。日本語話者が英語を学ぶときには分節音、リズムなどもそうであるが、音節構造の違いによる困難が大きく、これをいかに克服するか両言語の音節構造を対比しながら実践的対処法が指南された。日本語の単純な(C)(j)V(N)の音節構造に対し、英語は(C)(C)(C)V(C)(C)(C)(C)のように語頭3子音、語尾4子音の連続となる。ところが頭子音(Onset)が2つの場合でも、2つ目のr, j, wが母音的あるか、最初にsが来るか、3子音の場合でも最初の2子音がs+p, t, kで後ろに母音的子音が続くことを知ればよい。また語末子音群(coda)についても最大4子音だが、この場合は形態素が付加したためで子音連続とは言えない。加えて開放の省略や音素の脱落があるため実際には子音の複数連続とはならない。英語にはCの数や発音の労力を減らしCVに近づけようとする傾向があるので、英語を発音する際は、子音を減らす発音を試みる方が理解されやすいのではないかなど興味深い示唆が多くなされた。



角田太作氏による講演『私が行ってきた研究—日本語学から一般言語学への貢献—』はタイトルの通り、角田氏のこれまでの研究史が年代を追って披露され、言語学研究への変わらぬ大きな情熱が伝わってきた。大学院時代のWarrongo, Djaruなどの豪州原住民語、その後の言語類型論への取り組み。「二項述語階層」「所有斜格」や

他動性、語順などの研究はよく知られている。さらに言語消滅危機や言語再活性化の分野での精力的な取り組みだが、Warrongoの記録と普及、復活運動がある。後半は、わが国における言語研究の姿勢や要望についてのメッセージが熱く語られた。例えば、言語は狭いテーマだけに取り組むのではなく、文法、語彙、テキストの3拍子そろった包括的なものでなければならない。一方で、日本語のすぐれた研究が世界の一般言語学に取り上げられていないもどかしさ、や日本語研究から世界の一般言語学

**13 Dec., 2014- Lecturers: Naonori NAGAYA, Hiroko SAITO (TUFS), and Tasaku TSUNODA (Professor Emeritus, National Institute for Japanese Language and Linguistics)** NAGAYA introduced the languages of the Philippines which features both morphological reduplication and repetition with a syntactic function. The two differ phonologically, morphologically, syntactically and semantically; iconicity is more typically found in repetition than in reduplication. SAITO's stated that Japanese learners of English struggle not only with phonetic segments and rhythm, but syllabic structure too. She suggested practical remedies through a comparison of syllabic structure in Japanese and English. Professor TSUNODA's work on two-argument clauses, genitive and oblique cases, transitivity and word order is well known, but he is also active in the linguistic typology of indigenous Australian languages and efforts to record and revive the endangered language Warrongo. He urged researchers to focus on grammar, lexicon and text rather than narrow research fields, and lamented the lack of recognition in general linguistics of accomplished research by Japanese academics. His own research into noun-concluding constructions and mermaid constructions ([clause noun copula] structures, common to around 20 Asian languages) has contributed greatly to general linguistics. (Toshihiro TAKAGAKI)

への貢献がなされるべきだという必要性についても力説された。紹介された角田氏の「体言締め構文」ないしは「人魚構文」の共同研究がまさにその好例である。[節 名詞 コピュラ] (華子が名古屋へ行く予定だ) のような人魚構文は主としてアジアの20ほどの言語に共通するという。名詞の文法化の問題をも含め、一般言語学に大きく寄与しているに違いない。(高垣敏博)



## 「パレスチナで何が起きているか——ガザ51日間戦争と〈イスラーム報道〉」 2014年12月16日 Lecture Report: "What is happening in Gaza: the 51-day Gaza War and Islam in the Japanese media"

昨年7月から8月にかけての「ガザ51日間戦争」で、イスラエルはパレスチナのガザ地区に対してTNT火薬にして推定20キロトンの爆弾を使用した。広島型原爆が推定18キロトンであることを考えれば、空前の破壊と殺戮がおこなわれたといえる。岡真理さんはこの「ガザ51日間戦争」について、その破壊と殺戮の規模、死者数(パレスチナ側の死者2158人、うち民間人1460人)、イスラエル側73人(イスラエル国防軍66人、民間人7人)、攻撃対象が国連施設・病院・人口密集地域・民間人であったことなどの事実から、その輪郭を描いたあと、「日本のマスメディアは出来事をいかに〈カバー〉したか」という観点から、次の点を指摘した。すなわち 1) 出来事の発端 2) 戦争はいつ始まったのか 3) エジプト提案の無条件停戦案についての報道ぶり 4) 「人間の楯」をめぐるハマス非難に偏した報道、などの争点である。それはさらに次の点から詳しく説明された。すなわち、日本のマスメディアがイスラームを〈カバー〉する振る舞いにおける、①「占領」という歴史的な文脈の捨象、②出来事の発端である、イスラエル人3少年の誘拐・殺害の強調(イスラエルの占領継続の企図の隠ぺい)、③報道されない封鎖の暴力の存在、④イスラエルにおけるレイシズムについての報道の欠如、⑤日本と国際社会は何をなすべきか、である。こうした争点について、映像資料もふんだんに紹

介しながら、岡さんは日本のマスメディアによる〈イスラーム〉の「隠蔽と支配」を厳しく問いただした。日本と国際社会はイスラエルによるジェノサイドや戦争犯罪についての不処罰を繰り返している。しかも日本政府は昨年5月に「日本、イスラエル包括的パートナーシップ協定」を結んでいる。そして、こうした日本政府と日本社会の態度の根底には、植民地主義に対する認識の欠如があると指摘した。パレスチナの現実と、〈イスラーム報道〉と現代日本とのつながりを明晰に論じた講演であった。参加者は本学の学生を中心に50名余り。講演もその後の討論も、予定の時間を大幅に上回るほど、充実した、そして白熱した時間であった。(友常勉)



**Mari OKA criticised the Japanese media's coverage of the "51-day Gaza War" in July-August 2014, citing 1) disregard of the historical context of "occupation"; 2) emphasis on the kidnap and murder of 3 Israeli youths as the origin of the conflict, concealing the fact of the ongoing Israeli occupation; 3) lack of coverage of the violence of the Israeli blockade; 4) lack of coverage of racism in Israel; 5) the response demanded of Japan and the international community. She furthermore identified the attitudes of the Japanese government and Japanese society towards the genocide and wartime violence committed by Israel against Palestine as stemming from a lack of awareness of colonialism. (Tsutomu TOMOTSUNE)**

## ワークショップ報告「依頼行為の対照研究—日本語母語話者と中国人日本語学習者—」 Report "Strategies adopted by native Japanese speakers and Chinese learners of Japanese when making requests"

日時： 2014年12月11日(木) 17:40-19:10  
発表者：孫楊氏(中国・揚州大学准教授、東京外国語大学外国人研究員)

会場：東京外国語大学 研究講義棟1階113室

相手に負担をかける依頼行為は、その表現や方法にバリエーションがあり習得が難しいことから、語用論研究で頻繁に取り上げられるテーマである。孫氏は、かつてご自身が経験した依頼行為についての苦い経験から、依頼に関する研究を始めたという。発表内容は、依頼場面における言語使用についての質問紙調査の分析結果、調査対象は、中国人大学生(中国在住者と日本留学生)、日本人母語話者、他の言語を母語とする日本語学習者、各100~150名の膨大なデータである。調査項目は、負担の程

度(ペンを借りる、自転車を借りる)、緊急性(急に気分が悪くなり病院に連れて行ってもらうよう依頼する)、話し手と聞き手の関係(教員に推薦状を依頼する)に注目したものである。分析結果には次のような特徴が見られた。緊急性のある依頼では、日本語母語話者は「〜て」形や「〜てください」の使用が多かったが、中国人に学習者は「急に」などの副詞を使用して差し迫った状況を示す一方で、「〜していただけませんか」のような丁寧な依頼表現の使用というアンバランスが見られた。また、談話構造では、依頼表現の前置きにおいて、日本語母語話者は、詫び表現(「すみませんが」、「申し訳ありませんが」など)が多いのに対し、学習者は注意喚起(「あのう」「〜さん」など)の使用が多く見られた。さらに、



母語話者は、学習者と比べて負担の程度に応じて依頼する理由の説明を行うことがわかった。

近年、依頼行為や依頼談話に関する調査研究は、ロールプレイやシナリオによるデ

ータの収集が多く見られるが、質問紙調査は、日本語学習者の依頼行為に対する意識、依頼のストラテジーや依頼表現の形式の習得などを探れる点において有効である。

当日の参加者は30名で市民聴講生を中心とするフロアと活発な意見交換が行われた。(谷口龍子)

**Speaker: Sun YANG (Yangzhou University, China) 17:40-19:10 Thursday, December 11th** Professor Yang presented data from over 500 Discourse Completion Tasks (DCTs) completed by native Japanese speakers and by Chinese and other learners of Japanese. While most native speakers use "-te" or "-te kudasai", learners use the more polite "-teitadakemassenka" though they express a sense of urgency in emergencies, resulting in imbalanced expressions. In terms of discourse structure, most native speakers precede requests with expressions of apology ("sumimasen" "moshiwake arimasen"), whereas learners use expressions to draw the listener's attention ("ano" "~san"). DCT data collection is useful for understanding learners' awareness and acquisition of such expressions. Around 20 lecturers, students and visitors attended the lecture and contributed to the discussion. (Ryuko TANIGUCHI)

## 国際日本研究センター特任研究員紹介 Introducing ICJS Visiting Researchers

博報財団第10回「国際日本研究フェロシップ」の招聘研究者として1年間の予定で当センターに滞在するナデジダ・ウェインブルグ氏(イルクーツク国立言語大学)、スタニスワフ・マイヤー氏(ヤギェロン大学)にご寄稿いただきました。



**ウェインブルグ:** 日本語の敬語とポライトネス理論との関わり、日本語の敬語の特徴と戦略、ロシア語の敬意表現、その歴史、現代ロシア語のポライトネスを研究しています。「ポライトネス」と「フェイス」は日本語の直接翻訳がなく、日本文化に正確に関連させることができないこと。1917年の革命以前にロシア語にも日本語の敬語のような社会位置と人間関係によって使われた特別な単語が存在したこと。ロシア語の言語ポライトネスは話の結果に影響を及ぼすとしてよく使われるが、日本語の敬語使用は相手によって決められ、話の結果の影響はそれほど強くないことなどがおもしろいと思います。言語ポライトネスの実際のあらわれ方は国・文化固有のものであることを示したいと思います。



**マイヤー:** 琉球大学大学院では沖縄近代史を専攻、2002年に卒業し、2007年香港大学で博士号を取得しました。研究範囲は琉球の歴史、日本の少数民族、また日本語教育などです。ヤギェロン大学では日本史の他に、日本語と漢字の授業も担当しています。博報財団「国際日本研究フェロシップ」での研究プロジェクトは「漢字ジゴク: ポーランド人の日本語学生向けの多機能のEラーニング・プラットフォーム」。紙の辞書、字典をあまり使わなくなっているこの時代のニーズに積極的に応じなければならないと思います、大学のカリキュラムに合わせた漢字教育用のウェブサイトとスマホ・アプリの作成に携わっています。プロジェクトの詳細は以下のウェブサイトをご覧ください。  
<http://info.filg.uj.edu.pl/~smeyer/kanji/>

Following articles were contributed by our visiting researchers, **Nadezhda VEINBERG (associate Professor of Irkutsk State Linguistic University, Russia)** and **Stanislaw MEYER (associate Professor at Jagiellonian University, Poland), who stay in TUFs from Sep. 2014 to the end of August 2015 by the fellowship of Hakuho Foundation.** **VEINBERG:** I am researching Japanese honorifics and politeness theory, its features and strategies, and comparing it to Russian honorific expressions and history as well as politeness in modern Russian. I would like to indicate how differences in politeness relate to individual cultures and countries' backgrounds.

**MEYER:** I specialize in Okinawan modern history, and at my alma mater in Krakow I teach Japanese history, Japanese language and kanji classes. As a guest researcher at TUFs as a Hakuho Foundation Fellow, I am working on a project titled "Kanji Jigoku: a multifunctional e-learning tool for Polish students of Japanese language". <http://info.filg.uj.edu.pl/~smeyer/kanji/>

## 2014年度 活動報告 (10月~2015年2月) Activity Report (Oct 2014-Feb 2015)

### ■講演会・ワークショップ等■

- 10月15日(水)「V4+日本 交流年2014」事業実行委員会主催 国際日本研究センター共催 日本美術技術博物館manggha開館20周年記念「クラフにおける日本のふるさと」国際シンポジウム、ポスター展(〜11月14日)ボグナ・ジェフチャルク=マイ氏(日本美術技術博物館manggha館長)、カタジナ・ノヴァク氏(同副館長)、加須屋明子氏(京都市立芸術大学)、スタニスワフ・マイエル氏(ヤギェロン大学/博報財団招聘者)、森田耕司氏(東京外国語大学)
- 10月30日(木)社会言語部門主催 講演会「紐帯としての日本語〜『日本』を離れた日本語」谷口龍子氏、友常勉氏(東京外国語大学)
- 12月11日(木)国際日本語教育部門主催 第6回ワークショップ「依頼行為の対照研究ー日本語母語話者と中国人日本語学習者」孫楊氏(中国揚州大学)
- 12月13日(土)対照日本語部門主催 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第14回研究会 角田太作氏(国立国語研究所名誉教授)、斎藤弘子氏、長屋尚典氏(東京外国語大学)
- 12月16日(火)比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 講演会「パレスチナで何が起きているかーガザ 51日間戦争とイスラーム報道」岡真理氏(京都大学)
- 1月29日(木)比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 ミニシンポジウム「アジア映画における身体、イメージ、(壁)——『座頭物語』、『中華女児』、『緋牡丹博徒 お竜参上』」菅孝行氏(評論家、劇作家、梅光学院大学)、友常勉氏、橋本雄一氏(東京外国語大学)

### ■会議歴■

- センター会議: 2014年 10月9日、11月13日、12月18日、2015年1月15日、2月5日

### ■今後の活動予定■

- 3月7日(土) 14:00~17:30 対照日本語部門主催 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第15回研究会 有賀節子氏(大阪樟蔭女子大学)、早津恵美子氏、森田耕司氏(東京外国語大学)
- 3月20日(金) 15:00~17:00 国際日本語教育部門主催 文法・語用と教育シリーズ第4回研究会「学習者コーパスに基づく日本語誤用辞典〜日本人による英語・中国語学習者コーパス誤用類型との対比〜」小柳昇氏(拓殖大学、十文字学園短大)、市川淳太氏(アジア・アフリカ語学院)、佐野洋氏、望月圭子氏(東京外国語大学)

### ■Lectures and Workshops■

- 15 Oct.: *International Symposium "Japanese Home in Krakow"* by Bogna Dziechciaruk-Maj, Katarzyna Nowak (the Museum of Japanese Art and Technology "Manggha"), Akiko KASUYA (Kyoto City University of Arts), Stanislaw Meyer (Jagiellonian University/ICJS), Koji MORITA (TUFs) **15 Oct.-14 Nov.: Poster Exhibition "Japanese Home in Krakow": the 20th Anniversary of Manggha Museum of Japanese Art and Technology in TUFs**
- 30 Oct.: *Lecture "Japanese-Language as a bond: Japanese Language used outside of Japan"* by Ryuko TANIGUCHI, Tsutomu TOMOTSUNE(TUFs)
- 11 Dec.: *The 6th Workshop "Request Strategies-Differences between Native Japanese and Chinese Learners"* by Sun YANG (Yangzhou University, China)
- 13 Dec.: *"Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 14th Research Seminar* by Tasaku TSUNODA (National Institute for Japanese Language and Linguistics), Hiroko SAITO, Naonori NAGAYA (TUFs)
- 16 Dec.: *Lecture "What is Going on in Gaza of Palestine: The Representation on the 51 days of Gaza War and Islam in Japan's Media"* by Mari OKA (Kyoto University)
- 29 Jan.: *Mini-Symposium "Bodies, Images and Walls in Asian Films: The Tale of Zatoichi, China Girl, Red Peony Gambler (Hibotan bakuto: oryu sanjo)"* by Takayuki KAN (Critic, Playwright, Baikou Gakuin University), Tsutomu TOMOTSUNE, Yuichi HASHIMOTO (TUFs)

### ■Meetings■

- Center meetings: 2014 - 9 Oct., 13 Nov., 18 Dec., 2015 - 15 Jun., 5 Feb.

### ■Future Events■

- Sat. 7 Mar. 14:00-17:30 *"Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 15th Research Seminar* by Setsuko ARIGA (Osaka Shoin Women's University), Emiko HAYATSU, Koji MORITA (TUFs)
- Fri. 20 Mar. 15:00-17:00 *The 4th Workshop "Dictionary of Japanese errors based on a Learners' Corpus"* by Noboru OYANAGI (Takushoku University/Jumonji Junior College), Jyunta ICHIKAWA (Asia-Africa Linguistic Institute), Hiroshi SANJO, Keiko MOCHIZUKI (TUFs)